

委員会報告

口腔衛生関連用語に関する提言

日本口腔衛生学会用語委員会

小関 健由¹⁾ 加藤 一夫²⁾ 佐藤 勉³⁾ 千葉 逸朗⁴⁾

口腔衛生会誌 65 : 305-306, 2015

第7回 歯垢関連用語について

今期執行部体制での用語委員会の『口腔衛生関連用語に関する提言』は、今回の第7回が一区切りとなる。ここで、これまで用語の提言を編集してきた用語委員会から、用語の定義や活用に関しての感想を、歯垢に関わる用語を例に述べたいと思う。これまでの用語の使用に関する注意喚起や問題点の提起を通して、日本口腔衛生学会会員の皆さんの用語に関するご意見を広くお伺いするとともに、疑問に思う用語やあやふやな活用例がみられる用語等、問題を感じる用語を是非とも本委員会にお教えいただきたい。

プラーク (日本歯科医学会学術用語, 歯科医師国家試験出題基準, 歯科衛生士国家試験出題基準)

デンタルプラーク (日本歯科医学会学術用語, 歯科医学教授要綱)

歯垢 (日本歯科医学会学術用語, 歯科医学教授要綱, 歯科衛生士国家試験出題基準)

歯苔 (日本歯科医学会学術用語)

バイオフィーム (日本歯科医学会学術用語, 歯科医学教授要綱, 歯科衛生士国家試験出題基準)・口腔バイオフィーム (歯科医師国家試験出題基準)

歯垢は、歯の表面に付着する軟らかい堆積物 (広辞苑) を表す一般名詞として広く臨床の現場や口腔衛生活動に使われ、一般の方の認知度も高い。現状では、歯垢の英語であるプラークが専門用語として優先して使われているようである。歯科の二大疾患である齲蝕と歯周疾患の病因であるプラークは、研究の進展に伴い病因因子としての理解の在り方も歴史的に変遷してきた。す

なわち、歯面に付着する汚れである細菌塊としての『歯の垢』的などらえ方 (Non-specific plaque hypotheses) から、特定の病原微生物が疾病を惹起するとしたプラークに質的な相違があるとした考え方 (Specific plaque hypotheses) に進み、さらにはプラークを一つの微生物叢複合体として考え、宿主と微生物間や微生物間の相互作用の結果、プラークが量的にも質的にも遷移するといったバイオフィームの考え方 (Ecological plaque hypotheses) への変遷を、世紀を超えて辿ってきたと考えられる。見方を変えれば、この歯面の堆積物のどの面を強調したいかによって、表現する用語が変わってくるであろう。なお、歯苔という用語は現在使用されていない。

プラーク等の歯科医学界全域にわたって活用される用語は、口腔衛生学分野に留まらず、各学会等がそれぞれの立場から定義を行っている場合がある。日本歯科保存学会編の保存修復学専門用語集¹⁾では、プラークを『歯面に付着した細菌とその代謝産物である基質および70~80%の水分から構成されている、バイオフィームの形態をなす集塊。(以下略)』、バイオフィームは『微生物が付着・凝集して固形基質表面に生じる膜状構造。(以下略)』としている。一方、日本歯周病学会編の歯周病学用語集第2版²⁾では、プラークを『歯や口腔内の固形構造物上に付着または固着した白色から黄白色の軟性の付着物。(以下略)』、バイオフィームは『菌体外多糖からなるグリコカリックスに覆われた細菌の凝集塊が物質表面にフィルム状に付着したもの。(以下略)』としている。それぞれ、齲蝕と歯周疾患を考慮した定義であり、多くの部分は共通であるものの、細部にわたる点ではいくつかの論点が考えられる。転じて、われわれが日本口腔衛生学会編の用語集を単独で制作したとしても、

¹⁾ 東北大学大学院歯学研究科予防歯科学分野

²⁾ 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座

³⁾ 日本歯科大学東京短期大学歯科衛生学科

⁴⁾ 北海道医療大学歯学部保健衛生学分野

立場の違う学会からは同様の眼差しを浴びるであろう。

今回、『口腔衛生関連用語に関する提言』を連載するに当たり、全委員の感想は、その用語の示す本質が明確に限定されていること、すなわち用語を定義することは歯科医学の基盤となる科学を成立させる前提条件として極めて重要な課題であることである。日本語を常用するわが国では、各学術団体横断的に用語の定義と活用方針

を決定し、逐次更新していくことが少なくとも必要である。今後、各方面に呼びかけていきたい。

文 献

- 1) 特定非営利活動法人日本歯科保存学会編：保存修復学専門用語集。医歯薬出版，東京，2009，65，74頁。
- 2) 特定非営利活動法人日本歯周病学会編：歯周病学用語集第2版。医歯薬出版，東京，2013，70，77頁。